

芽が出てきた五月初め、待ちに待ったタモイが発表された。幸いに帰国者の仲間に入った。うれしかったが、残された戦友たちの顔を見るのがつらかった。来たときと同様貨物列車に乗せられ、ウランウデを後にした。昭和二十二年五月六日であったと思う。

シベリア本線を五日余り走り、海の見えるナホトカに着いた。海の間こうは日本である。列車から降りた皆の足取りが軽い。ソ連将校の先導で歩いているが、港より逆の方向に向かっている。おかしいと思っっているうちに、とうとう山奥の収容所に入れられてしまった。そして翌日からまたも飢えと寒さと強制労働を強いられ一年半を過ごした。

この間、強烈な民主運動の嵐が吹き荒れた。何事も帰る日までと耐えがたきを忍び、戦友同士励まし合い助け合い、入ソ以来四年間悲惨な抑留生活を生き抜いた。九死に一生を得たとはこのことか。今でも思い出すとぞっとする。

昭和二十四年九月二日舞鶴港に入港。夢にまで見た懐かしい祖国の土を踏んだ。国敗れて山河ありと祖国

の山や河は美しかった。あの感激は生涯忘れることができない。また、今なお異国の地に眠る亡き戦友を思うと、胸が痛む。

## 満州から強制抑留、そして帰国

新潟県 中沢 仁作

あの痛ましい第二次大戦終結からはや四十五年は過ぎた。ソ連で強制抑留中死亡した者六万以上、満州でソ連と戦闘で死亡された軍人、民間人は抑留中死亡された者よりはるかに多いと聞く。私たち生きて帰国した人でも、はや死亡者は多く、どうやら生き延びている私たちでも若い人で六十六、七歳、みんな老齢になり、生き延びている者は数が少ない。

私は、昭和十九年四月十日、現役兵として千葉県市川市国府台野戦重砲兵第十七連隊に入隊、同月二十五日渡満、満州国牡丹江省東寧県石門子第一〇一三部隊に転属、ソ満国境の整備につく。五月だというのにま

まだまだ寒く、気候の厳しさは内地と大きな違いがあった。

南方の戦況は悪化し、関東軍も南方に行動する部隊が多く、ソ満国境も手薄くなり、中支、南支方面から満州に移動する部隊が多くなってきた。私の部隊でも、二十年に入ると他の部隊に何百人と転属して行った。私も満州第一〇八歩兵部隊に六月一日付をもって特別攻撃隊教育兵として二か月間の転属を命ぜられ、七月三十日原隊復帰した。決死部隊要員だから徹底した教育であった。

すでに私たちにはソ連との戦いはわかっていて、国境の地下ケーブル撤去も終了し、私たち部隊も一兵残らず一装用の軍服に身を固め体には認識票をつけ、ソ連との戦闘状態に入った。

私たちの部隊も退却を余儀なくされ、見たものは日本軍兵士、満人、日本婦女子の死体、沿道にゴロゴロしていた。開拓団から女、子供ばかりの人たち、泣きながら幼子を背負い、風呂敷包み一つで、よちよち歩きの子供の手を引いていずくへ行くともなくとぼとぼ

と歩いていく。何とも言いようのない気持ちで、本当に悔しかった。満員の列車で、日の丸の鉢巻き姿で身を乗り出し手を振って行く日本婦女子も多く見た。

私たちの部隊は昌図で武装解除され、揚木林にてソ連編成第十五作業大隊として九月下旬（記憶薄し）、幾日も貨車に乗り孫呉駅で下車、黒河まで徒步行軍。死亡者続出。黒龍江の水の張るのを待って徒歩で入ソ、ブラゴエシチエンスクに上陸。私たちのソ連抑留生活はここから始まった。

入ソと同時に身に付けているものはソ連兵に全部取られた。貨車の中を二段式にしてブラゴエ駅からシベリア鉄道に乗り、「ヤポンスキー、ウラジオ経由で東京ダモイ」とだまかされ、全くその当時は言葉はわからず困った。貨車のうちでは大小便はほとんどたれ流しであった。極寒と飢え、そして下痢腹痛で何人かの同胞は死んでいった。頭が狂って貨車から飛びおり逃亡し、射殺された者も見た。

幾日も貨車に乗り、着いたところは極寒の地で、月日も記憶にない。羊の群れが追われるがごとく原野を

歩き、倒ればもはや死亡するしかない。バラックは点々とあり、そこを過ぎたところが私たちの強制労働を待つ収容所であった。

今でも収容所の名稱は知らない。地名はザグスタインといっていた。板塀と鉄條網に囲まれ、四方の角には望楼が立ち監視兵がいた。

作業は道路工事、火力発電所、コルホーズ、炭鉱、森林伐採である。私たちはすでに栄養失調が多く、体力も衰えていた。収容所は幾つかの土窟の棟があり、そこへ入れられた。身体検査があり、一級、二級、三級、四級と階級が決められ、一級は重労働一日作業、二級は一日軽作業または半日作業、三級は収容所内作業、四級は作業なしであった。その作業によってノルマが決まり、パーセントによって食物の量が決まるのである。

私は身体検査の結果一級になり、五百人とともに森林伐採作業に行った。シベリアの冬は極寒で、落日も早い。飯盒のふたに一杯のかゆと、百グラムほどの黒パンで飢えをしのいだ。日増しに栄養失調者が続出し

てきた。

伐採作業は三人一組で、二人は鋸でひき、一人はなたで枝をおろす。なたで皮をむいて印のあるエゾマツのみの伐採であった。ノルマは何本であったか記憶がないが、六メートル、八メートルの長さに切り、馬で目的地まで引き出すのである。零下四十度になっても作業は続行され、二月に入ると現場も遠くなり、往復の時間も長くなる。足を引きずりながら収容所に帰るのである。毎日同じ作業の繰り返しであった。

五百人いた同胞は飢えと極寒で二百人以上死亡したのに収容所長は驚き、作業の中止を下した。後日わかったことだが、經理符校が糧秣をモンゴル部落へ横流しをしていたことが判明した。

あらゆる作業で死亡した同胞は冷凍そのもの、全裸にされどこへともなく運ばれていく。私たちは、全くわからない場所で埋葬されたか山に捨てられたか、判明しない。山犬の餌食になっていた同胞もいたのではないか。

食糧は、大豆ばかり二、三か月続いたと思うとアワ

が一月、コウリヤンが二月というぐあいに、米は一粒も食べなかった。こんな食糧で作業ができるはずがない。入ソしてわずか六月くらいで相当数の同胞が異国の凍土の下で眠ってしまった。

シラミがたかるし、発疹チフス、赤痢、マラリヤの患者が多く、南京虫で夜は眠れない。死亡者続出で、本当に悲惨であった。私もマラリヤにかかったこともある。二日熱である。赤痢にかかり下痢がとまらず隔離され、松の木を焼いて炭をつくり、その炭を食べて下痢どめの薬にしたこともあった。便所は外で、夜は何十回も行くので眠る時間がない。下痢をしているからなおさらだ。同胞が毎日死んでゆくのを見るたびに、きょうは我が身かと何度も思った。

パーセントの上昇しない作業よりパーセントの上がる炭鉱と思い、自分で希望して採炭所に入った。坑内は深く初めて入ったときは地獄そのものであった。一番長く作業したのは炭鉱で、なれてくるとパーセントも上昇し、食べる黒パンも増えるようになった。それまでは各班ごとに食べ物の分配ともなると、一人々々

の目の色が恐ろしいほど変わってくる。それほど飢えていたのである。

私はあるとき坑内で落盤に遭い意識不明になり、腰を痛め入院したこともあった。死亡者が多く出たのは入ソから二十二年の春過ぎまでと思う。その後、強健な者ばかりになり、食糧の配給も多くなってきた。体力もついてきた。一層パーセントが上昇してきたが、一たん病気になると同復は遅く、死亡してゆく同胞も少なくはなかった。

炭鉱の帰り、月の明かりで馬鈴薯を拾い、防寒外套の物入れに入れて帰りペーチカであたたまってしていると、何だか臭い。物入れに手を入れると、何と馬糞であったこともある。零下四十度以上も下がれば、こんなことがざらであった。

近いところに湖があり、私たち同胞が名づけたのだらうカモ湖と言っていた。夏は暑くても日影に入ると涼しいのがシベリアの特徴でもあろう。この湖から木材を馬で引き上げる作業もした。食べ物は少ないから、馬の鼻づらをなぐり馬の食糧(エン麦)を飯盒でとり、

そのまま食べ飢えをしのいだこともある。胃腸が強健であったから何でも食べられた。胃腸の弱い同胞は死亡していった。

イルクーツクの収容所へも少数であったが移動した。そこでバイカル湖の氷割りをした。極寒でとても耐えられなかった。ここでも死亡した同胞は全裸にされてどこにもなく運ばれていった。

二十三年の春までいて、いささか記憶が薄いがウラシムデ第八収容所に入所した。発電所の石炭おろし、機関車工場、運動場（スタジアム）新設作業、山を崩して三交代作業もした。一番つらかったのは石炭おろしである。四十トン、五十トン貨車から一人でおろすので悲惨であった。とてもパーセントが上がるものではない。

二十三年の七月、民主運動の最も盛んなときウラシムデから二段式貨車に乗りナホトカに向かつて帰国の途についた。ナホトカでは民主化運動が盛大にて、言うことをきかなければ乗船できないぐらいは知っていた。

無事に中沢仁作も名簿に記されており、ナホトカの大地をけて信洋丸に乗船。昭和二十三年八月十四日、四十一大隊三六六中隊第二班で出港、八月十六日舞鶴港に上陸、帰国した。

八月二十日、父母、姉弟が待つ我が家へ無事帰宅できたのは本当に運がよかったと思う。あの極寒の地シベリアでの抑留生活、苦しい悲惨な地獄のような生活、毎日不安な日々でした。私たち体験した者でなければわからないことです。いつまでも忘れてはならないことです。本当に走馬灯のごとく駆けめぐり、思い出されず。

あの痛ましい戦争、そして強制抑留のため尊い生命をなくされた多くの犠牲者に、静かに冥福を祈る一人であります。

## 何日再見望郷の想い

福岡県 三上 巖

昭和十四年三月、大阪府庁より満州国建築局へ家族とともに赴任しました。十九年國務院防空部に転勤、翌三月防空総本部と協議のため上京。十日早朝列車不通により横浜駅にて乗り換えのとき多くの被難民に会い、早朝東京大空襲を知り、戦争は多くの市民に悲惨な苦しみを与えることを身をもって知りました。

調査資料を整理する暇もなく五月十三日、第二国民兵の私にも召集令状があり、四十歳くらいの人約四百人がハイラルへ召集され、部隊といっても木銃一本の装備であつた。

召集兵は翌日より爆破訓練を受け、召集兵を残して大隊全員と私ら召集兵三人は興安嶺の築城のため完全装備で出動し、各連隊より編成された約一万人の部隊は地下特殊兵舎の築造に、にわか作業隊で負傷者が多

く、連日昼夜兼行の三交替で地下壕の掘削を続け、一日六十か所の爆破を行った。八月十三日夜、ソ連戦車の侵入があり、特別攻撃隊が編成され出動したが、多くの戦死者を出し、部隊全員投降する。

八月十五日終戦の詔勅を知らされ、それ以来家族戦友のことを考え、生涯忘れることのできない屈辱と悔恨の日々が始まりました。

全員フルギ飛行場で武装解除され、さらにチチハル歩兵師団に各地より收容された後、連日シベリアに強制抑留が始まった。

收容者全員に健康診断を受けさせ、作業不可能者には胸に赤札をつけさせ作業隊と分けられ、赤札のみ二百五十人くらい客車に乗せられ満州里を経てソ連領に向かった。

車中ではチタを東に向かえばタモイ、直進すれば奥地に連行されるとの話題で、何日の間にか声もなくなり、バイカル湖近くのウランウダという町に下車、三日くらい粉雪がちらつく線路わきに食糧も与えられず放置された。